神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	アメリカ人旅行家ウィリアムズ女史が観た明治の日本 ―当館所蔵『ウィリアムズ女史日本旅行記念蒐集資料』から―
著者	嶋村元宏
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 38 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2012 年（平成 24 年）3 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【研究ノート】

アメリカ人旅行家ウィリアムズ女史が観た明治の日本

―当館所蔵『ウィリアムズ女史日本旅行記念蒐集資料』から―

嶋村元宏

【要旨】

本稿は、当館が所蔵する『ウィリアムズ女史日本旅行記念蒐集資料』（以下、『蒐集資料』）を紹介するとともに、それらの資料からウィリアムズ女史の日本における活動を復元し、一アメリカ人女性が観た明治中期の日本の様子を、「もの」資料を通して明らかにしていくことを目的とする。これまで文献資料を中心に蓄積されてきた幕末明治期における西洋人の日本観研究に、「もの」に視点を置く新たな研究手法を導入するものである。

ウィリアムズ女史は、横浜を起点に、日光、東京、伊勢、京都、神戸、広島、長崎を訪れ観光を楽しむ傍ら、美術工芸品の購入に熱心であり、世界漫遊家の典型といえる。今後の課題としては、太平洋横断航路を持つカナダ太平洋鉄道会社と深い関わりを持っていたことも含め、『蒐集資料』とともに、ウィリアムズ女史についてもさらなる研究を進めてく必要がある。

【キーワード】 世界漫遊家　ジャポニスム　カナダ太平洋鉄道会社
日本観

はじめに

一八五九年七月一日、神奈川（横浜）が前年にアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと締結した修好通商条約の規定により開港すると、貿易を目的とした外国商人が相次いで来日した。しかし、日本が欧米諸国へ対し開国した一九世紀半ばは、欧米人による世界旅行が隆盛を極めた時代でもあり、来日する外国人は貿易を目的とした商人だけでなく、世界旅行の一環として日本を訪れ、日本各地の観光を主たる目的とした世界漫遊家と呼ばれる旅行家も多数来日するようになったのである。

東北地方を日本人男性の案内により一人で旅行したイギリス人女性のイサベラ・バード[1]に代表されるように、日本を旅行した多くの外国人は、それまで「神秘のベール」に包まれていた日本を直接体験し、日本に関する見聞記を著している。そして、それらの見聞記は欧米において日本のイメージを形成する重要な情報源となっていったのである。一九世紀当時の欧米における日本観の形成に重要な役割を果たす一方、今日では、当時の欧米人による日本観を研究する上で重要な資料として位置づけられている。

しかしながら、来日外国人の大多数が英語を母国語とするイギリス人やアメリカ人であったことから、当然彼らが遺した文章は英文で記されていることが多く、また英文以外にもフランス語やドイツ語などの欧文文献である。したがって、それらの文献を解読するためにはその言語に通じていることがこの分野を研究する上で必須条件であるこ

とから、これまで、当該研究については英学史研究者を中心とする欧文学研究者によって蓄積されてきているのが実状である。このように文献研究が主流となって、外国人による日本観研究が進められてきたが、文献だからこそ伝えられることとともに、その一方で文献からだけでは実像がつかみきれないという限界も存在しているのである。

その欠を補う意味において当時の「もの」からの視点も必要であると考えられる。その当時の状況を伝えるに足る「もの」が神奈川県立歴史博物館所蔵『ウィリアムズ女史日本旅行記念蒐集資料』(以下、『蒐集資料』)である。この『蒐集資料』は、九七年八月頃に横浜を訪れたアメリカ人女性ルイーズ・M・ウィリアムズ Louise M. Williams[2]が、離日する九七年末までの約五ヶ月間にわたり、横浜を起点に日本各地を旅行した際に入手したチラシや店舗カード、はたまた領収書など、旅行後にはややもすると処分してしまうような八七点の雑多な「もの」の集まりである。

そこで、『蒐集資料』を紹介するとともに、彼女のたどった行程を復元し、一アメリカ人女性が観た明治中期の日本の様子を、「もの」資料を通して明らかにしていくことが、本稿の目的である。

1. ウィリアムズ女史の行動状況

(1) 一八九七年八月

①横浜

まず、『蒐集資料』を収集した人物について、確認しておきたい。『蒐集資料』中には、氏名を表すいくつかの資料が含まれているが、その中でも本人であることを断定する公文書としては、「外国人内地旅行免状」【1】[3]を挙げることができる。神奈川県庁が発給した「外国人内地旅行免状」に、駐横浜アメリカ代理領事の署名が入った、「外

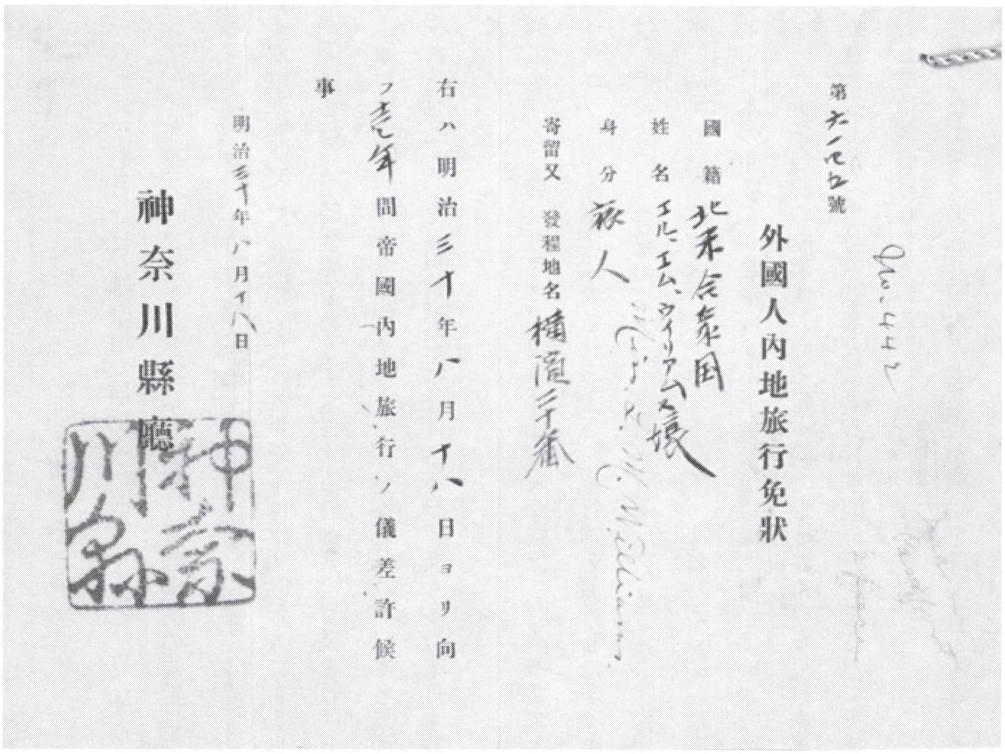
第六一七五號
外國人内地旅行免狀
國籍 北米合衆國
姓名 エル、エム、ウイリアムス嬢
身分 旅人
寄留又 發程地名 横濱三十番
右ハ明治三十年八月十八日ヨリ向フ壹年間帝國内地旅行ノ儀差許候事
明治三十年八月十八日
神奈川縣廳

図1　外国人内地旅行免状【1】

国人内地旅行免状」に関する説明文書が紐で綴られている。

そもそも条約締結国人は、条約の規定により開港場から原則として陸路十里四方は、自由に旅行できるものとされていたが、それを超えて当時「内地」と呼ばれた日本国内を旅行する場合に必要とされたのが「外国人内地旅行免状」である。これは、現在のパスポートに当たるもので、各開港場を管轄する県が発給した。

ウィリアムズ女史が所持していた「外国人内地旅行免状」は、定型部分は印刷されており、国籍、姓名、身分、寄留又ハ発程地名および有効期限と発給年月日が記入できるようになっている。その記載部分から、「明治三十年八月十八日」つまり九七年八月一八日に、「横浜二十番」にあった横浜グランドホテルに居留する「北米合衆国」を国籍とする「旅人」「エル、エム、ウイリアムス嬢」が一カ年間日本国内を旅行することが神奈川県庁によって許可されたことが判明する。

つまり、これらの資料を入手した人物は、九七年八月頃横浜に来日し横浜二十番にあった横浜グランドホテルに投宿したアメリカ人旅行者L・M・ウィリアムズ嬢であり、アメリカ領事館を通じて日本国内旅行を申請し、八月一八日に神奈川県庁から許可されたのである。

なお、この一綴りの文書は、神奈川県庁による「内地旅行免状」と記された封筒【2】に入れられて、ウィリアムズ女史へ渡されたものであると考えられる。裏面には、七条にわたる「帝国内地旅行外国人心得」が印刷されている。そして、アメリカ代理領事によるウィリアムズ宛の「外国人内地旅行免状」の英文説明一葉が付されているのである。

また、本人の「外国人内地旅行免状」は遺されていないものの、ウィリアムズ女史とともに行動した人物がもう一人いたようである。後述する「電報送達紙」【9】の裏面に、「M. M. W.」とイニシャルのような文字や、「N. Y. C」「New York City」という文字がいくつも鉛筆書きされており、ニューヨーク出身の「M・M・W」のイニシャルを持つ人物の存在が推測できる。さらに、『蒐集資料』に西洋人女性二人が写された写真もあることから、今回の内地旅行は、おそらくウィリアムズ女史とこの「M・M・W」の二人で行われたのではないだろうか。

さて、ウィリアムズ女史が投宿した横浜グランドホテル[4]は、七〇年夏、イギリス公使館および関連施設の跡地であった横浜海岸通二〇番地に開業した。その後程なくして営業を中断したが、七三年九月、W・H・スミスを総支配人として新装開店し、八九年には、株式会社組織となり、翌九〇年にフランス人建築家サルダの設計によって、一八・一九番地に新館を増築している。

その横浜グランドホテルに関する資料としては、まず、「Bill of Fair」【3】つまり「外国人内地旅行免状」を入手した翌日である八月一九日に横浜グランドホテルで提供された夕食のメニューがある。表紙は、和室でお客をもてなそうとする日本人の様子が、グランドホテルの全景が描かれた衝立と共に描かれ、見開きに、当日の夕食メニューとワインリストとしてシャンパン、ワイン、ビールなどが詳細に記載されており、ホテル史や料理史などの分野にとっても本資料は意義あるものといえよう。また、裏表紙には、紅葉の中を流れる滝を背景に、演奏曲のリストが付されている。なお、本資料の印刷は、横

浜にあったBox of Curiosという印刷所で、後述する輸出入を専門とする英字新聞【10】の印刷も行っている会社である。

さらに、今日のホテルの客室に備え付けられているのと同様、当時横浜グランドホテルの宿泊者向けサービスとして置かれていたホテル

図2　横浜グランドホテルの1897年8月19日のディナーメニュー【3】

の便箋【4】、ホテル発行のPlan of Yokohama（横浜詳細地図）【5】、The Grand Hotel L. T. D.（横浜周辺のガイドブック）【6】も、『蒐集資料』に含まれている。

②日光

「外国人内地旅行免状」を入手したウィリアムズ女史は、まず日光へ出かけていったことが、アメリカへ郵便を送った際に日光の郵便局で受け取った「書留郵便物受取証」【7・8】から判明する。いずれも、八月二二日付である。また、「電報送達紙」【9】は、八月二六日に、「〔中禅寺湖観光記念証〕」【10】は、同三〇日の日付を持つことから、ウィリアムズ女史は、日光に一〇日間ほど滞在していたことになる。

その日光の観光に関する資料としては、「野州二荒山中宮祠之図」【11】とその外袋【12】、「東照宮金幣祈祷祭図」【13】、「大日本帝国日光山一覧全図　外袋」【14】、「日光山中宮祠撰八景之図」【15】がある。今日でも多くの観光客が訪れる日光の名所中の名所であり、また、御神橋通にあった名金堂で名物の練り羊羹にウィリアムズ女史も舌鼓を打ったようである【16】。

また、日光におけるウィリアムズ女史の宿泊先は、幕末の横浜に来日したヘボンのすすめで、金谷善一郎が七三年に外国人専用の「金谷カッテージイン」として営業を始め、九三年に現在地に開業した金谷ホテルと、中禅寺湖畔にあった和泉屋であったと思われる。

まず、金谷ホテルに宿泊していたことは、先述の「電報送達紙」から推測することができる。「電報送達紙」は、「チウセンジ　レーキホテル」つまり中禅寺湖ホテルから、「ニツコウカナヤホテル　ヲキタ

ヤタロ」宛てに、「アリガタイヘヤナイ」と打たれたもので、金谷ホテルに滞在中であったウィリアムズ女史の依頼で、金谷ホテルの沖田弥太郎が中禅寺湖ホテルへ空室状況の確認をしたその回答と考えられる。

さらに「To W 4 OKITA」と毛筆書きされた金谷ホテルの封筒に鉛筆書きで「Bills」と書かれたもの【17】がある。これより、沖田弥太郎が金谷ホテル滞在中ウィリアムズ女史の世話係であったと思われる。また、神戸の今井松之助が差し出した「贈リ券」【18】は、神戸三ノ宮駅前の山口運送店が、金谷ホテルの沖田弥太郎へ荷物一個を四銭で送ったことを伝えているが、その受け取り先欄に「金谷ホテルニテ／沖田弥太郎殿」とあり、ここから「ヲキタヤタロ」の漢字も特定できる。

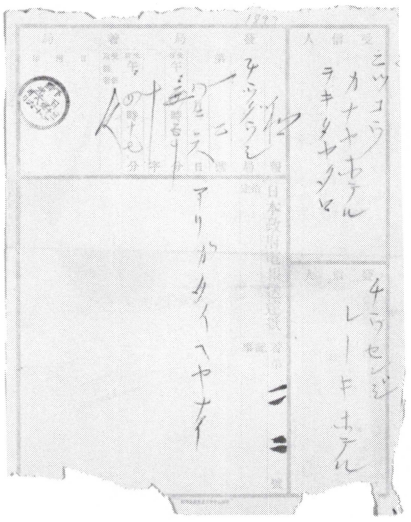

図３　中禅寺湖レークホテルから金谷ホテルの沖田弥太郎に宛てられた電報送達紙【9】

なお、金谷ホテルは、三つ折りのホテルカード【19】を用意しており、表面はホテルの全景写真が、裏面には、金谷ホテルの説明と横浜から日光までの路線図並びに時刻表が印刷されている。

次に、中禅寺湖の和泉屋に投宿したことも、先述の「〔中禅寺湖観光記念証〕」に、毛筆で、

大日本下野国日光
中禅寺湖
和泉屋方
宇以利阿無酢嬢
明治参拾年八月参拾日

とあることから判明する。

当初、中禅寺湖畔の宿泊先として中禅寺湖ホテルを考えていたが、適した部屋がなかったことから、和泉屋へ宿泊先を変更したのである。

（2）一八九七年九月

①横浜

横浜で発行された九月二日付英字紙「The Dairy Reporter of Imports and Exports」【20】、二葉の写真【21・22】と、玉村写真館の領収証【23】から、九月初頭には日光での滞在を終え横浜へ戻り、美術品などの買い物をしたと思われる。

二葉の写真は、いずれも横浜の金沢八景を遠望で撮影した風景写真である。どちらも写真カバーに「キシモト」と筆書きされており、一葉【21】は九七年九月三日にウィリアムズ女史へ贈られたことが書き込みから判明する。また、もう一葉【22】も同じ台紙を持つ写真であり、同時に贈られたと考えるべきであろう。

なお、横浜弁天通一丁目二番地にあった玉村写真館は、日本人写真師の草分け的存在の一人である玉村康三郎が開業した写真館であり、スタジオ撮影に加え、写真の販売も行っていた。領収書によれば、ウィ

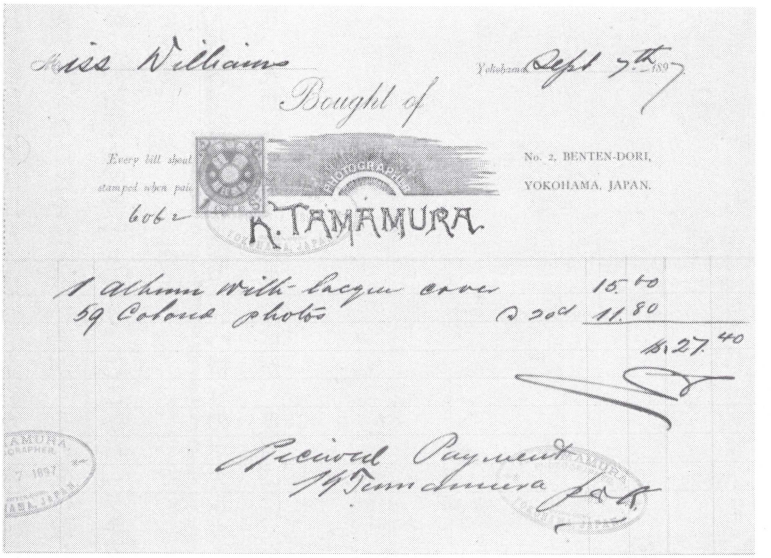
Miss Williams
Yokohama Sept 7th 1897
Bought of
Every bill should stamped when paid
No. 2, BENTEN-DORI,
YOKOHAMA, JAPAN.
K. TAMAMURA
1 Album with lacque cover 15.40
59 Colored photos @ 20 cts 11.80
$27.40
Received Payment
K. Tamamura

図４　玉村写真館の領収証【23】

リアムズ女史は、九月七日、五九枚の写真に蒔絵の表紙をつけた写真アルバムを二七ドル四〇セントで購入している。玉村写真館は、八二年の開業以来、写真アルバムの海外輸出にも力を入れ、八八年には、アメリカからの大量受注に成功していた。[5] アメリカ人のウィリアムズ女史にもよく知られた存在であったと思われる。

また、店舗カードだけなので時期は確定できないが、横浜市北仲通一丁目一一番地で漆器、金工品をはじめ陶磁器を扱っていた沼嶌美術店【24】や横浜市本町通一丁目二二番地に井村彦次郎が創業した松石屋【25】を訪れている。なお、松石屋は、横浜における最古の絵付陶器店である。

これらの領収書や店舗カードから、現在の県庁に近い一丁目付近に美術工芸品を外国人相手に販売していた美術商が多く存在していたこが理解できる。

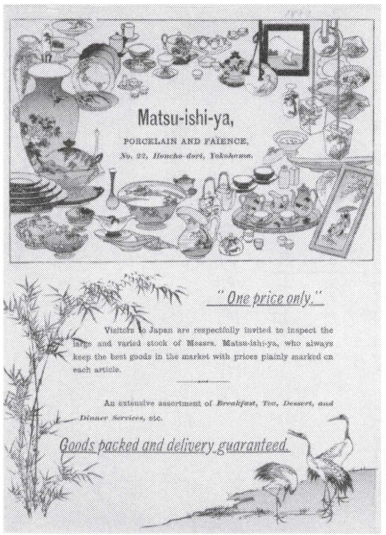
Matsu-ishi-ya,
PORCELAIN AND FAÏENCE,
No. 22, Honcho-dori, Yokohama.
"One price only."
Visitors to Japan are respectfully invited to inspect the large and varied stock of Messrs. Matsu-ishi-ya, who always keep the best goods in the market with prices plainly marked on each article.
An extensive assortment of Breakfast, Tea, Dessert, and Dinner Services, etc.
Goods packed and delivery guaranteed.

図５　松石屋の店舗カード【25】

②東京

日光から横浜へ戻ったウィリアムズ女史は、東京へもしばしば足を運んでいた。

九月一三日付の二枚の「書留郵便受取証」【26・27】は「桜田本郷町石神」から、九月一七日付の二枚【28・29】は「帝国ホテル」から、書留郵便をいずれもアメリカへ送ったことを示すとともに、ウィリアムズ女史が東京にいたことも示している。東京彫工会主催の展示会への九月一二日付招待状【30】を受け取っていることから、もしかすると、九月一日から二五日迄開催されていたこの展示会にあわせて東京を訪れていたのかもしれない。なお、東京彫工会とは、八六年に発足した彫工関係者の団体で、一般人の観覧を許した彫刻競技会は、八八年に上野の美術協会陳列館で開催されている。[6]

また東京での買い物は、京橋区尾張町二丁目一三番地で折本と東錦絵纒を扱う中村商店【31】で、九月九日にクリスタル球、銅製の龍の置物、木製スタンドを九三円で、一一日には写真アルバム二冊を一〇円で購入しており【32・33】、日本橋区川瀬石町一六番地で古代錦縫箔着

物揃帛紗類を扱う道明【34】や丸善書店【35・36】も訪れたようである。さらに市村座では九月一五日に観劇をしたことが「都新聞笠森団子十一串」【37】から判明する。

なお、東京での宿泊先は、帝国ホテルだったようで、すでに紹介した「書留郵便受取証」の他、帝国ホテルの便箋の一部【38】が、『蒐集資料』に含まれている。

③箱根・宮ノ下

東京から一度横浜へ戻ったのか不明であるが、次にウィリアムズ女史が訪れたのは、箱根の宮ノ下であった。

日光と東京同様、九月二一日付の四枚の「書留郵便受取証」【39・40・41・42】は、ウィリアムズ女史が宮ノ下からアメリカ宛に書留を出したことを示しており、具体的に滞在場所を確定することはできないが、次の京都へ向かう途中に箱根に滞在したと思われる。宮ノ下には、外国人専用ホテルとして有名な富士屋ホテルがあるのでそこに滞在したと考える方が適当であろう。

④京都

関東を離れたウィリアムズ女史が次に向かった先は京都であった。ここでも、美術工芸品や染織品を大量に購入している。

九月二六日には、古門前二丁目三三番地のO. Komai（駒井カ）で花瓶やボタンなどを三四円【43】で、黒田では刀二振りを二〇円【44】で購入していることがそれらの領収書から判明する。領収書の日付によれば、九月三〇日に来店している。

また、女史が訪れた店としては、漆、銅製品、瀬戸物、骨董を扱う古門前三九番地の林伸助【45】、新門前梅本町の古代縫織物商野村商会【46】、寺町四条南の銅鉄細工の井上吉兵衛【47】がある。さらに、寺町通綾小路下ル東側の請印彫刻司晴湘堂園田耕三【48】のところで、自身の印章【49】を製作させたと考えられる。その印影は「瑠威須印」であり、試し押しをした紙【50】とともに『蒐集資料』の一部となっている。

京都での宿泊は、やはり外国人専用ホテルとして八一年に開業した也阿彌ホテルで、九月二五日から二泊、九月二九日から二泊、一〇月五日から二泊と合計六泊滞在し、あわせて三八円二五銭が部屋代であった。その他、食事料六円五〇銭、予約手数料八円一二銭、心付け一円九〇銭を加算すると、ウィリアムズ女史が也阿彌ホテルへ支払った総額は、五四円八三銭であったことが、遺された領収書【51】から知ることができる。なお、也阿彌ホテルのカード【52】の裏には、旅行で使った費用のメモが書き残されている。

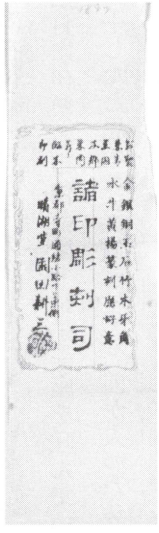

図6　ウィリアムズ女史が自身の印章を発注した請印彫刻司晴湘堂園田耕三の店舗カード【48】

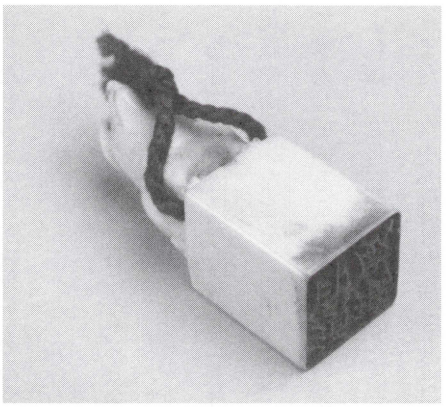

図７　「瑠威須印」と彫られている【49】

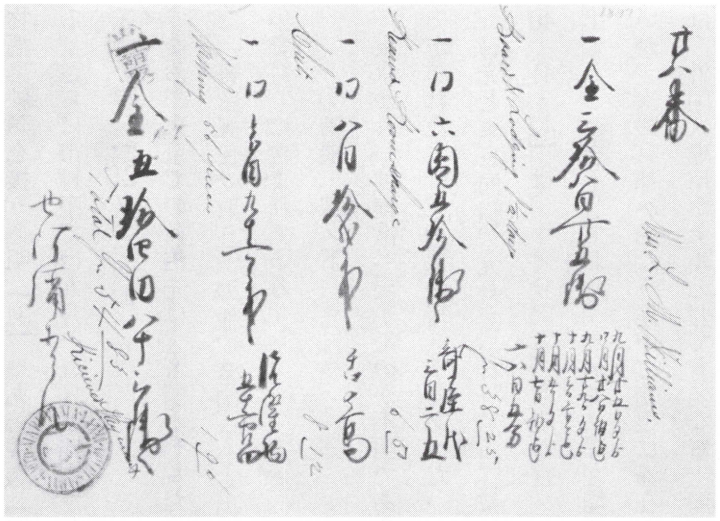

図９　京都也阿彌ホテルの領収証【51】

図８　自身の印章を試し押ししている【50】

（3）一八九七年一〇月

①伊勢

京都に滞在後、一行は伊勢参りを行っている。その伊勢参りでは、一〇月四日に伊勢古市備前屋で踊子一座を呼んでいる【53】。また、その際入手したと思われる、備前屋の名前が入った袋【54】があるが、どのようなものであるか不明である。さらに、具体的日付は欠くが、宇治の山田ホテル宇治館に投宿していることが領収書【55】の存在からわかる。そして、そこではお茶の席を催しており、その料金は二円であった【56】。

この伊勢参り旅行で非常に興味深いのは、日光同様、日本人の世話人が存在することである。しかし、ホテル付きの世話人ではなく、この伊勢参りから神戸までの旅行全体をサポートする、一種の旅行案内人とでもいうべき人物であると思われる。

その日本人とは、伊東祐貞という者で、皇大神宮の神楽殿を参拝し、神楽料として五円を一〇月一四日に納めた際の領収書【57】に代表者としてその名が見える。そしてその領収書が入っていた包み紙【58】とともに、「天照皇大神宮小御神楽」【59】および「金幣祈祷祭順序・御宮殿内模様略記」【60】も残っている。また、神楽殿を参拝した日は、「毎日新聞」【61】も入手したようである。

なお、その伊東祐貞であるが、後述するように、神戸在住者のようで、一度京都に戻ったウィリアムズ女史が神戸を訪れた際、その家族とも対面しているようである。

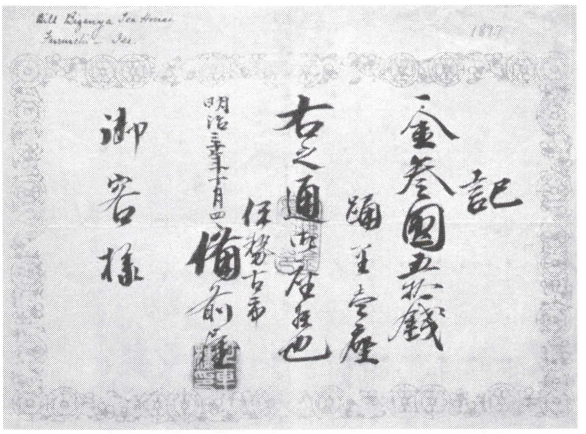

図10　伊勢の備前屋で芸者を呼んだときの領収書【53】

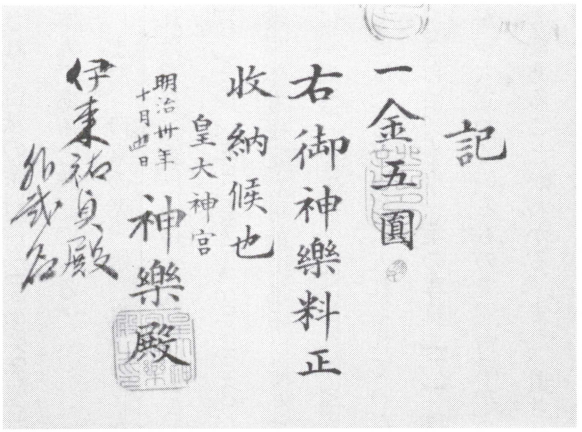

図11　御神楽料の領収書は、案内人の伊東祐貞宛になっている【57】

②香港あるいは京都？

伊勢参りを果たしたウィリアムズ女史の足取りが、その後一時期把握できなくなる。日付からすると香港に行ったことになるのである。すなわち、一〇月二六日付・同二七日付でウィリアムズ女史宛の香港ホテルの領収書【62・63】があるのである。さらに、ウィリアムズ女史と断定することはできないが、香港のミー・チェンの写真館で撮影された老齢の一人の西洋人女性の写真【64】や、金工品、漆器を扱うTAK SHANGの店舗カード【65】がある。香港を訪れたことは疑いようが無く、それがいつであったかということが問題なのである。

しかしながら一〇月二五日付の「菊細工広告」【66】や、香港ホテルの領収書と同じ日付を持つ京都高島屋領収書【67】、一一月九日付のO. Komaiの領収書【68】および、その後の行程から判断すると、伊勢参り後京都に戻ってきたと考えるほうが自然であるように思われる。

いずれにせよこの香港での滞在については、今後さらなる追究をしていく必要がある。

③神戸

伊勢参り後の足取りはひとまず置くとして、神戸のオリエンタルホテルの夕食メニュー【69】に記された日付によれば、一一月一〇日にそこで夕食をとっているようである。また、オリエンタルホテルの便箋があることから、滞在したと考えるべきであろう。なお、このメニューは毎日提供される料理が変わるようで、すべて手書きされている。食文化史の観点からも注目すべき資料である。

買い物は、遺されたカード類【70・71】から推測すると、元町三一三番地の越後屋の屋号を持つ美術商の池田商会で行ったと思われる。残念ながら、領収書類が遺されていないため、これ以上のことは不明である。

さて、この神戸では伊勢参りの際、案内人を務めた伊東祐貞とその家族との親交を深めたようであり、神戸の写真館で撮影された写真からそのことが十分理解できる。まず、伊東祐貞本人の肖像写真【72】であるが、富士山が描かれた書き割りをバックに杖をついた伊東が写

され、台紙の余白に「Ito Sukesada」とペン書きされていることから、本人であると確認できる。

また、伊東の妻、娘、息子の三人が写された写真【73】もある。これは、台紙裏に中村写真館の広告が印刷されており、さらに「Mrs. Ito/Miss Yuki/Master Sukemaro」とペン書きされていることから被写体も確定が可能である。そして、二種類ある写真袋の一つ【74】に、「With Complete/M/Mrs. & Miss Ito/Kobe」との書き込みがあり、もとはこの写真袋に入れられていたと思われる。

さらに、もう一葉の写真【75】は、二人の西洋人女性の後ろに男性が一人立っているもので、台紙から神戸の市田写真館で撮影されたものであることがわかる。また、遺された写真袋【76】には、「Interpreter/Kobe/1898」とあり、日本人通訳とウィリアムズ女史一行であると推測できる。ただし、写されている二名の女性のうちいずれがウィリアムズ女史であるかは判別できない。なお右に写る女性は、香港の写真館で撮影された写真の被写体と同一人物である。

図 12　神戸市田写真館で撮影された伊東祐貞の肖像写真【72】

図 13　伊東祐貞の家族写真【73】

図 14　二人の女性の内どちらかがウィリアムズ女史と思われる【76】

④広島から長崎へ、そして離日

神戸を後にした一行は、広島の厳島神社で御札【77】を入手し、長崎へ向かっている。そして、長崎では諏訪公園内の「どんこう」というレストラン・バーに行ったようである。しかし、たんなるレストラン・バーではなく、「若い女性とダンスを楽しめ」、「夏には涼しく快適に長崎の夜景を鑑賞することができる」レストランであると、店舗カード【78】に印刷されている。また、裏面には、ウィリアムズ女史直筆の長崎港賞賛する言葉とともに、京都で製作した印章が押されている。数多い『蒐集資料』中、試し押しは別として実際の使用例はこれのみである。

さて、その後の足取りであるが、長崎からどこへ向かったのかを知ることができない。『蒐集資料』にクリスマスカード【79】があることから、一二月に入ってからカナダ太平洋鉄道会社（Canadian Pacific Rail Company. 以下、CPRと略称）の汽船に乗って離日したと思われる。そのクリスマスカードは日本人女性や日本の風景写真が張り込まれている台紙に中央部にCPRの定期航路に就航している蒸気客船を中央に配置したものである。客船内あるいは乗船前にCPRから乗客へ配布されたものと考えられる。

そして九八年一月五日付の中国で発行されていた英字紙China Mail【80】があることから、九七年末から翌年の正月までの間に長崎から中国へ渡ったと考えられよう。

2．雑多な資料

以上、ウィリアムズ女史の足跡を知ることが可能な資料を中心に紹介し、女史の活動について考察してきた。しかしながら、これまで紹介してきた資料以外に、『蒐集資料』中には直接女史の活動を裏付けるには不十分な資料が遺されている。以下、その他の資料について紹介しておく。

まず、横浜グランドホテルの夕食メニューを発行したThe Box of Curiosが発行した*The Weekly Box of Curios*【81】がある。商船会社、銀行、石炭供給会社など横浜にあった外国商社の広告がある頁が部分的に遺されている。

つぎに、非常に日本的なものであるが、鶴【82】と福助【83】の折り紙や、紅葉が描かれた紙に認められた和歌【84】が遺っている。日本人の誰かに教えてもらって作ったのであろう。福助は鉛筆で、顔や袴などが書かれている。

そして、ウィリアムズ女史の今回の旅行で重要な役割を果たしたCPRに関する資料が三点ある。

まず一点は、一八九七年一一月一六日付でCPR所有の蒸気客船エンプレス・オブ・チャイナからウィリアムズ女史宛という形式になっているMEMORANDUM【85】であるが、内容は神戸・横浜間の乗船料の領収書である。すでに述べたように、一一月一〇日は神戸オリエンタルホテルで夕食をとっており、その後の具体的な足取りが不明確になっている時期である。神戸から広島へ行ったと仮定したが、こ

の領収書を考慮すると、一一月一六日に神戸から蒸気客船で横浜へ戻ったということになる。とすると、一度横浜に戻ってから、再度広島・長崎を経由して中国へ向かうということになるが、この行動は、あまりにも不自然であると思われる。

香港に関する資料とともに、この領収書の扱いについても十分検討する必要がある。

次に、Map of the Canadian Pacific Railway Co.'s Steamship Route（カナダ太平洋鉄道会社蒸気船ルート図）【86】であるが、おそらく乗船時に入手したものであろう。

CPRは、一八八一年カナダ建国にも影響を与えたとされる西海岸と東海岸とを結ぶ横断鉄道を敷設すべく設立された。そして、八六年その鉄道の延長として東海岸からアジアへ向けての定期航路を就航させている。つまり、大航海時代以来ヨーロッパからアジアへ向かう一般的なルートであった大西洋からインド洋を経る東回りではなく、ヨーロッパから大西洋を渡り、カナダ横断鉄道で太平洋側に出て、そこから再度蒸気船で太平洋を横断してアジアへと達するという、宗主国であったイギリスの西海岸から一つの会社の列車と船でアジアの東海岸へ到達する西回りルートを完成さ

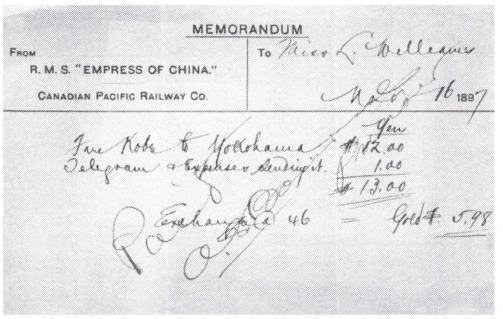
MEMORANDUM
FROM
R. M. S. "EMPRESS OF CHINA."
CANADIAN PACIFIC RAILWAY CO.
TO Miss L. Williams
Nov 16 1897
Fare Kobe to Yokohama Yen $12.00
Telegram & Expenses Sending it 1.00
$13.00
Exchange 46 = Gold $ 5.98

図15　カナダ太平洋鉄道会社所有のエンプレス・オブ・チャイナからウィリアムズ女史に宛てられた領収書【85】

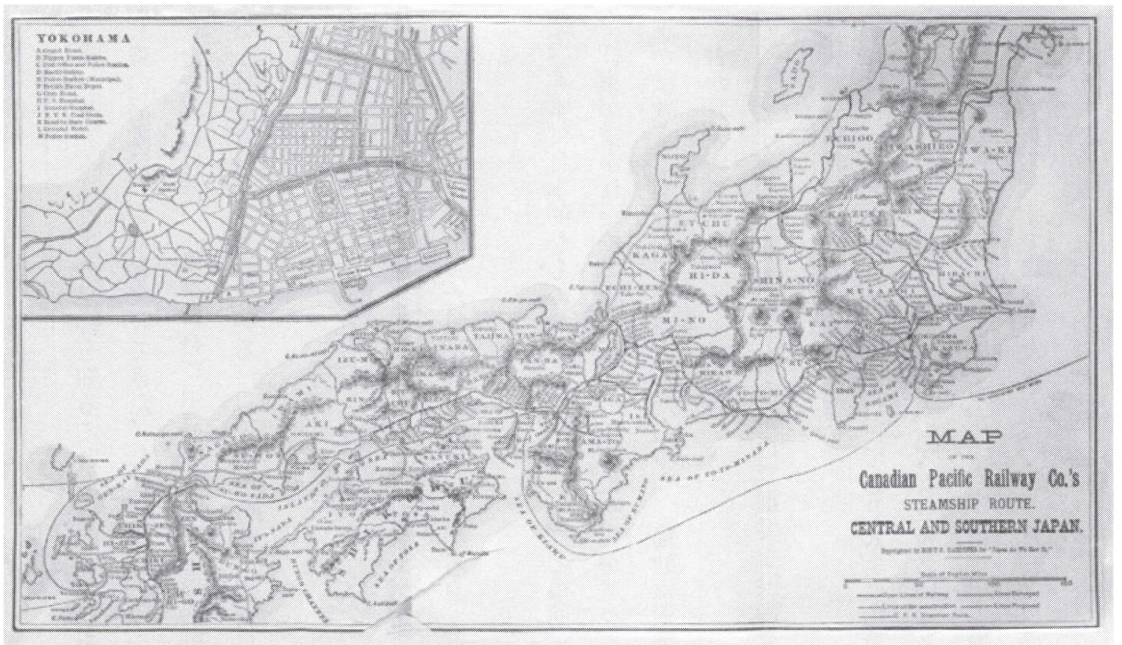

図16　カナダ太平洋鉄道会社が発行した日本地図【86】

せたのである。(7)

ニューヨーク出身とおもわれるウィリアムズ女史の場合、ニューヨークからカナダ東海岸のモントリオールまで北上し、そこから横断鉄道で西海岸のバンクーバーへ行き、蒸気船でアジアへ向かったと考えられる。

最後に*A WOMAN'S PLEASANT VENTURE*（ある女性の愉快な冒険）【87】であるが、当初当館でこの『蒐集資料』を受け入れた際、もとの所蔵先では、ウィリアムズ女史がとった行程と、この冊子の内容とが同じことから、作者とウィリアムズ女史が同一行程をとっていたと推測していた。しかし、内容的には、作者であるジョージナ・M・B・ロバーツが、カナダ太平洋鉄道のE・V・スキナーの依頼により、書簡文形式で書いた紀行文であり、鉄道でカナダを横断し、バンクーバーから横浜まで、Empress of China号を利用して、女性一人でも安全で快適な旅ができることを記した一種の広告冊子と考えるべきものである。

冊子が発行されたのは、ウィリアムズ女史が日本を離れて以降であるので、中国で入手したと思われるが、ウィリアムズ女史とCPRとの関係を示唆する興味深い資料である。

おわりに―今後の課題

本資料は、一人の旅行者が旅行中に入手したものが、偶然にも今日まで伝わったものである。写真等のようにその旅行を後々思い出すのに有効なものであれば、その保管にも気を遣うであろうが、本資料はそのような写真のみならず、旅行中にはすぐに捨てはしないものの、しばらくたてばあまり価値を見いだすことができず捨ててしまうような、領収書や店舗カードなどが多数含まれていた。写真ではなく、文字による記録だからこそ伝えてくれる事実も多数あり、当時の美術工芸品の値段やどのようなものを入手したかが具体的に知ることができた。

しかしながら、今回の紹介はあくまで多種多様な資料を一面的に紹介しただけである。本文中でも指摘したように、ホテルのメニューによりその当時の食事について知ることができるだけでなく、「外国人ウケするデザイン」という観点からもメニューを見ることも可能であろう。

いずれにせよ、『蒐集資料』から横浜を起点に、日光、東京そして、伊勢、京都、神戸、広島、長崎各地で、観光を楽しみつつ、美術工芸品を中心に熱心に買い物をしていた、ウィリアムズ女史の様子も見て取れた。ウィリアムズ女史はまさに、ジャポニスムが隆盛を極めた一九世紀末における、世界漫遊家の典型の一人といえるであろう。

まだ、本資料を利用した本格的な研究は始まったばかりであり、多面的な検討は今後の課題としたい。

註

（1）イサベラ・バード『日本奥地紀行』（平凡社、一九九〇年）参照。

（2）Williamsの日本語表記は、「内地旅行免状」や『蒐集資料』に含まれる資料に出てくる当て字から「ウィリアムス」とされているが、本稿では今日一般的に発音されている「ウィリアムズ」を用いる。

（3）【】内は、別掲の資料目録の番号。以下、同じ。

（4）横浜グランド・ホテルについては、澤護『横浜外国人居留地ホテル史』（白桃書房、二〇〇一年）一〇八―一一四、一二四―一三二頁参照。

（5）斉藤多喜夫『幕末明治　横浜写真館物語』（吉川弘文館、二〇〇四年）一九七―八頁。

（6）東京文化財研究所編・青木茂監修『東京彫工会』（近代日本アート・カタログ・コレクション、ゆまに書房、二〇〇八年）第一巻所収の田中修二氏による「解説」および高村光雲『幕末維新懐古談』（岩波文庫、一九九五年）二二三―二四〇頁参照。

（7）CPRについては、Morris, Keith, *The Story of the Canadian Pcific Railway*, London, 1916. を参照。

【付記】

本稿は、平成二二年度個別研究事業「一アメリカ人女性の観た明治の日本」の成果の一部であり、平成二三年三月に行われた調査研究報告会での口頭報告をもとに文章化したものである。

なお、本資料の整理に当たり、鎌田麻希氏の手を煩わせた。記して謝意を表します。

ウイリアムズ女史日本旅行記念収集資料目録

No.	資料番号	資料名称	作者	制作年月日（時代）	法量・寸法（タテ×ヨコ×高さ）
1	CU0007612	外国人内地旅行免状及び附属書類	神奈川県庁・アメリカ代理公使	明治30年8月18日	19.7×25.5
2	CU0007613	封筒	神奈川県庁	明治30年	20.5×7.2
3	CU0007614	Bill of Fare（メニュー）	グランドホテル	明治30年8月19日	23.9×16.8
4	CU0007615	便箋	グランドホテル	明治時代	25.0×19.8
5	CU0007616	Plan of Yokohama（横浜詳細図）	グランドホテル	明治時代	21.4×31.5
6	CU0007622	グランドホテル　The Grand Hotel L. T. D.	グランドホテル	明治時代	12.5×9.2
7	CU0007632	書留郵便物受取証		明治30年8月22日	11.3×8.3
8	CU0007633	書留郵便物受取証		明治30年8月22日	11.3×8.3
9	CU0007623	電報送達紙	チウゼンジ　レーキホテル	明治30年8月26日	22.7×18.2
10	CU0007624	〔中禅寺湖観光記念証〕		明治30年8月30日	41.8×32.0
11	CU0007626	野州二荒山中宮祠之図	田嶌鑛之助（発行者）	明治27年	38.4×49.5
12	CU0007625	野州二荒山中宮祠之図　外袋	田嶌鑛之助（発行者）	明治27年12月	18.7×14.2
13	CU0007628	東照宮金幣祈祷祭図	秦虎四郎（発行者）	明治30年	24.6×16.6
14	CU0007629	大日本帝国日光山一覧全図　外袋		明治時代	19.0×14.0
15	CU0007630	日光山中宮祠撰八景之図		明治時代	26.5×38.2
16	CU0007627	チラシ	名金堂	明治30年	24.4×17.0
17	CU0007631	封筒	金谷ホテル	明治時代	8.8×14.2
18	CU0007634	贈り券	神戸　今井松之助	明治30年8月30日	
19	CU0007635	ホテルカード	金谷ホテル	明治時代	10.4×30.0
20	CU0007621	The Dairy Reporter of Imports and Exports	Box of Curios Printing Office	明治30年9月2日	22.7×18.2
21	CU0007691	金沢八景遠望	キシヨシトモ	明治30年9月3日	16.5×10.8
22	CU0007692	金沢八景	キシヨシトモ	明治30年	16.5×10.8
23	CU0007618	領収書	玉村写真店	明治30年9月7日	17.6×23.8
24	CU0007619	店舗カード	J.MUMASHIMA'S	明治時代	9.5×13.2
25	CU0007620	店舗カード	Matsu-ishi-ya	明治時代	25.3×19.0
26	CU0007640	書留郵便物受取証	櫻田本郷町　石神	明治30年9月13日	11.3×8.3
27	CU0007641	書留郵便物受取証	櫻田本郷町　石神	明治30年9月13日	11.3×8.3
28	CU0007642	書留郵便物受取証	帝国ホテル　石神	明治30年9月17日	11.3×8.3
29	CU0007643	書留郵便物受取証	帝国ホテル　石神	明治30年9月17日	11.3×8.3
30	CU0007646	招待状	東京彫工会	明治30年9月12日	21.9×13.6
31	CU0007651	店舗カード	中村商店	明治時代	24.2×16.8
32	CU0007644	領収書	NAKAMURA	明治30年9月9日	24.4×21.4
33	CU0007645	領収書	NAMAMURA	明治30年9月11日	24.4×21.4
34	CU0007649	店舗カード	道明　岩本伝七	明治時代	6.6×10.0
35	CU0007652	丸善書店新刊雑書目	丸善書店	明治時代	
36	CU0007653	丸善書店新刊工業書目	丸善書店	明治時代	
37	CU0007647	都新聞笠森團子十一串	伊藤仁太郎	明治30年9月31日	22.6×15.2
38	CU0007650	便箋	帝国ホテル	明治時代	8.5×15.6
39	CU0007636	書留郵便物受取証	ウィリアムス	明治30年9月21日	11.3×8.3
40	CU0007637	書留郵便物受取証	ウィリアムス	明治30年9月21日	11.3×8.3
41	CU0007638	書留郵便物受取証	ウィリアムス	明治30年9月21日	11.3×8.3
42	CU0007639	書留郵便物受取証	ウィリアムス	明治30年9月21日	11.3×8.3
43	CU0007658	領収書	O.Komai	明治30年9月26日	18.1×20.8
44	CU0007657	領収書	黒田	明治30年9月3日	12.4×19.0
45	CU0007659	店舗カード	林新助	明治時代	12.0×9.4
46	CU0007660	店舗カード	野村商会	明治時代	7.2×11.2
47	CU0007661	店舗カード	井上吉兵衛	明治時代	6.2×9.8
48	CU0007662	チラシ	園田耕三	明治時代	24.0×9.6
49	CU0007695	印章（瑠威須印）	園田耕三カ	明治時代	1.0×1.0×2.7
50	CU0007696	印章付属物		明治時代	8.2×19.8
51	CU0007656	領収書	也阿彌ホテル	明治30年9月25日	27.0×20.0
52	CU0007663	ホテルカード	也阿彌ホテル	明治時代	9.1×12.5

ウイリアムズ女史日本旅行記念収集資料目録

No.	資料番号	資料名称	作者	制作年月日(時代)	法量・寸法(タテ×ヨコ×高さ)
53	CU0007674	領収書	備前屋	明治30年10月4日	19.4×26.1
54	CU0007675	袋	備前屋	明治30年	17.2×19.4
55	CU0007677	領収書	山田ホテル　宇仁館	明治時代	18.1×25.1
56	CU0007676	領収書	山田ホテル　宇仁館	明治時代	19.0×22.6
57	CU0007671	神楽料領収書	皇大神宮　神楽殿	明治30年10月14日	19.7×26.2
58	CU0007672	皇大神宮神楽殿「神楽料領収書」包紙	皇大神宮　神楽殿	明治30年	20.4×8.3
59	CU0007670	天照皇大神宮小御神楽	天照皇大神宮	明治30年	27.1×10.2
60	CU0007673	金幣祈祷祭順序・御宮殿内模様略記		明治30年1月	19.7×31.6
61	CU0007693	毎日新聞		明治30年10月14日	53.2×39.4
62	CU0007682	領収書.	THE HONGKONG HOTEL	明治30年10月26日	19.8×21.2
63	CU0007683	領収書	THE HONGKONG HOTEL	明治30年10月27日	19.8×21.2
64	CU0007681	人物写真	MEE CHEUNG 写真館(香港)	明治30年	16.5×10.8
65	CU0007680	店舗カード		明治時代	8.4×13.3
66	CU0007648	広告　竹細工		明治30年10月25日	50.4×35.2
67	CU0007654	領収書	高島屋	明治30年10月26日	15.4×21.8
68	CU0007655	領収書	O.Komai	明治30年11月9日	18.1×20.8
69	CU0007664	TIFFIN	ザ・オリエンタルホテル神戸	明治30年11月10日	26.0×16.6
70	CU0007666	店舗カード	IKEDA&Co.(ECHIGOYA)	明治時代	23.7×17.0
71	CU0007667	店舗カード	IKEDA&Co.(ECHIGOYA)	明治時代	7.3×11.0
72	CU0007665	伊藤祐貞肖像		明治時代	16.5×10.8
73	CU0007669	Master	中村貞治(写真師)	明治時代	16.5×10.8
74	CU0007697	写真用封筒		明治時代	17.4×11.5
75	CU0007668	集合写真	市田写真店	明治時代	16.5×10.8
76	CU0007698	写真用封筒		明治時代	17.0×29.2
77	CU0007678	御札	厳島神社	明治時代	35.3×5.9
78	CU0007679	店舗カード	どんこう	明治時代	6.9×10.1
79	CU0007687	クリスマスカード		明治30年	12.1×15.0
80	CU0007684	CHINA MAIL		明治31年1月5日	55.6×39.4
81	CU0007685	THE WEEKLY BOX OF CURIOS		明治時代	47.2×32.8
82	CU0007688	折り紙　鶴		明治時代	10.5×5.0
83	CU0007689	折り紙　福助		明治時代	8.5×12.0
84	CU0007690	和歌		明治時代	12.6×14.8
85	CU0007617	領収証	CANADIAN PACIFIC RAILWAY Co.	明治30年	13.4×20.7
86	CU0007694	Map of the Canadian Pacific Railway Co.'s Steamship Route(カナダ太平洋鉄道会社蒸気船ルート図)	CANADIAN PACIFIC RAILWAY Co.	明治時代	40.6×23.0
87	CU0007686	A WOMAN'S PLEASANT VENTURE(ある女性の愉快な冒険)	GEORGINA M.B. ROBERTS	明治31年	16.6×14.3